



飛騨匠と名工伝説

はじめに

奥深い山々と豪雪に閉ざされた飛騨の国。そこに住む飛騨匠たちは、豊富な木材を駆使して入神の技を身につけ、全国を巡って優れた彫刻や建築を残した・・・

私たちが飛騨匠に抱くイメージは、おおよそそのようなものだと思います。しかし、明らかに飛騨出身とわかる工匠は、天平宝字5年(761)から6年にかけて東大寺などの工事に携わった勾猪麻呂などわずかにすぎません。また彼が所属した造東大寺司の技術者50人のうち、飛騨出身は彼1人しかおらず、むしろ圧倒的に畿内出身者が多かったのです。

飛騨匠

実際の飛騨匠(飛騨工とも書く)は、奈良・平安時代に徴用された木工技術者を指します。律令制の



飛騨高山の街並み

租(米)・庸(労役10日もしくは布2丈6尺)・調(特産物)として知られる徴税制度のうち、庸と調を免ずる代わりに里(50戸)ごとに10人の木工(うち2人は飛騨匠たちのための炊事夫)を徴用して、都で1年間働かせるというもので、全国唯一

の特殊な制度でした。

これをみると、やっぱり飛騨には税を免除するほど優れた工匠たちがいた、と勘違いしてしまいがちですが、実状は全く異なりました。

飛騨匠の作業内容

まず、都にのぼった飛騨匠は、建築を司る造営省や木工寮などに配属されました。しかし、そこでの作業内容は、一般的な木工や木挽、運搬などで、建築や彫刻に優れた技量を発揮する、いわゆる大工職ではありませんでした。

そして、彼らの労働日数は1年間で実働333〜350日であり、夏季以外は休憩時間もないという、まるで奴隷のような扱いを受けていたのです。

重い負担

このような重い負担は飛騨匠だ

飛騨匠制度の背景

このような飛騨匠の制度が、どうして成立したのか。今となつては想像するしかありませんが、大化改新によって中央集権統治がはじまった結果、宮殿の造営などの建築需要が増したため、まとまった数の木工労働者を確保する必要が生じました。そこで山林豊かで人々の木工技術が平均的に高い地域が、特殊な木工徴用制度の対象として選ばれたと考えられるのが自然です。しかし、そのような地域は飛騨に限らず、近江など都の近くにもありました。

過酷な徴税制度の対象に飛騨が選ばれた一つの理由として、飛騨の人々は蝦夷と見なされていた可能性があります。まず、「飛騨」という国号ですが、奥州や九州にも「ヒダ」の音をつかった地名があり、「夷人」つまり蝦夷を表す「ヒナ」と同義だったという説があります。

それを裏付ける例をあげると、飛騨匠は過酷な労働に耐えかねて逃亡する者が多かったようで、たびたび捕縛命令がだされました。その中に「飛騨匠は言語や容貌が他国のものと異なるから、名前を変えてもわかる」と書かれており、風俗や身体特徴が都周辺の人々とは異なっていたことがわかります。こうしたことが、特殊な飛騨匠制度の成立に影響していたのかもしれない。

名工伝説の誕生

ところで、飛騨匠が名工であるという伝説は、『今昔物語』を皮切りに平安後期あたりから発生してきます。『今昔物語』では、「飛騨ノ工」という無名の工匠が、有名な実在の絵師である百済川成と技くらべをするという話で、「飛騨ノ工」がつくった四面すべてに入口をつけた一間四方の堂に、百済川成が入ろうとする、と自動的に入口の戸が閉まってしまい、どの方向からも入ることが出来なかつたとして、非凡な細工を施せる工匠として描かれています。

このように飛騨匠が優れた工匠として語られるようになったのは、「飛騨匠」という特別な徴税制度があり、しかも庸と調の免除は恩典だと考えられたことが、主たる要因だったように思えます。

もう一つは、飛騨の人々の風俗や容貌が都の人々の注目を集めたこと、もあげられるかもしれません。工匠説話では、しばしば人知を超えた細工の技が語られます。百済川成を悩ませた自動ドアもそうですが、龍や馬などの彫刻が生物のように動き出すなど、説話に登場する工匠は人外の力を持っており、容貌の異なる飛騨匠たちはこうした存在として語るに相応しかったのでしょう。

こうした説話によって、次第に「飛騨」という国号が工匠の地位を権威

づけるものとなったようで、中世後期以降には工匠のなかで「飛騨守」「飛騨允」といった称号を名乗るものも現れてきました。

名工は飛騨出身

こうして飛騨が名工の里という認識が広まると、実在・非実在を問わず名工はみな飛騨の出身と見なされるようになってきました。建築彫刻の名人として有名な左甚五郎も、実在したかはともかく、説話に語られる彼は名工として理想化された人物であり、江戸時代の喜多村信節が風俗事典の『嬉遊笑覧』で「飛騨の甚五郎と称せられたるを、のちに左と誤りとなへしも知るべからず」と言うように、由緒不明な優れた彫刻や建築は、「飛騨の甚五郎」の作品だとこじつけられ、いつしか「ヒダノ」が「ヒダリ」に変化したのかもしれない。



鞍作鳥がつくったという飛鳥大仏

けではなく、飛騨に残された人々にも強いられました。先に律令制度下の税制度「租・庸・調」のうち、飛騨は庸と調を免除されたと述べましたが、これは決して優遇ではありませんでした。

1年間に飛騨匠として徴用される人数はだいたい100人前後となりますが、彼らの食糧となる米を負担するのは、飛騨に残された人々でした。郷土史研究家の菱村正文氏の試算によると、飛騨の人々の米の供出量と、正規の庸・調を銭換算した結果、その負担額はなんと約60%も多かったという結果になりました。

そして、その米を都まで運ぶ役目も負わされており、さらに働き盛りの男が1年間も取られてしまうことから、飛騨の人々の生活は苦しいものだったに違いありません。

鞍作鳥

七世紀に活躍した鞍作鳥(止利とも書く)は、法隆寺の本尊釈迦三尊像や、有名な飛鳥寺の飛鳥大仏を製作したとされる実在の仏師です。彼は中国系の帰化人である司馬達等を祖父にもつ渡来系の人物ですが、やはり飛騨匠の流れをくむという伝説が残っています。

例えば、司馬達等の子である鞍作多須奈が良材を求めて飛騨に入り、そこで神女と出会って子をもうけ、その子の頸が鳥に似ていたので「鳥」と名づけたなど、名前から連想したのでしょうが異形・異才の人物として飛騨との関連が語られています。

おわりに

このように後世の説話によって、飛騨匠の名は私たちの間に広まりました。現在の飛騨は高山や古川の古い街並みや、白川郷の合掌造りなどで日本の原風景などと、もてはやされています。しかし、この影には、いにしへの飛騨の人々の苦難の歴史があったことを、華やかな名工伝説とは別に、いつまでも忘れてはならないのです。(文・江口知秀)